

調査事項、調査内容および所感

会 派 名	そうせいと維新	氏 名	菊地 格夫
調査日時	令和8年5月27日（水）～28日（木） 時間は別紙		
調査事項	高尾の森自然学校（東京都八王子市）、千葉市子ども交流館・子育て支援館・子ども科学館「きぼーる」（千葉県千葉市）		
調査内容	別紙記載		
所 感	別紙記載		

1. 高尾の森自然学校について【5月27日（水）15:00～18:00】

（1）視察目的

① 里山保全と都市生活の両立

秋田市では、人口減少や高齢化、担い手不足などにより、地域で維持されてきた里山環境の管理機能が低下している。その結果、

- ・耕作放棄地増加
- ・ニホンジカ、イノシシ等による獣害
- ・ツキノワグマの市街地出没（アーバンベア）

などの問題が顕在化している。高尾の森自然学校における、市民参加型里山管理、環境教育、都市近郊自然との共生、生態系保全の実践について学び、秋田市での持続可能な里山保全の参考とすることを目的とした。

② 環境教育を通じた「自然との距離感」の再構築

秋田市は豊かな自然環境を有する一方、子ども世代を中心に自然と接する機会が減少している。また、秋田市生物多様性地域戦略は存在するものの、実践的な環境教育プログラムが十分とは言えない状況にある。高尾の森自然学校では、単なる自然体験ではなく、生物多様性、森林循環、人と自然との関係性、里山文化などを体系的に学ぶプログラムが展開されており、ESD（持続可能な開発のための教育）の視点からも参考とした。

③ 都市公園・観光地と自然保全の両立

千秋公園のように、観光・歴史・市民利用・自然環境が重なる空間を抱える秋田市にとって、観光利用と生態系保全の両立は今後の重要課題である。高尾地域における、都市近郊自然利用、観光とのバランス、市民ボランティア活用、環境配慮型運営について学ぶことを目的とした。

④ 官民連携による自然保全モデル

高尾の森自然学校は、セブン・イレブン記念財団による支援・運営が特徴であり、企業・財団・市民・地域住民が連携する自然保全モデルとして注目されている。秋田市においても、大森山動物園周辺の塩曳潟に生息する絶滅危惧種ゼニタナゴなど、保全価値の高い自然資源が存在しており、官民連

携型自然保全の可能性を考える上で参考とした。

⑤ 生物多様性保全と地域価値向上

自然を「守る対象」としてだけでなく、観光、教育、健康、地域ブランド、市民参加などと結びつけ、地域価値として活用していく視点について学ぶことを目的とした。

(2) 視察内容

高尾の森自然学校では、利用者満足度を非常に重視している点が印象的であった。活動の最後に、その日の活動の写真を見ながら歌を歌い、活動を振り返る時間を開校以来継続しているとの説明があった。単なる体験で終わらせるのではなく、「顧客満足度」を意識して振り返りを通して学びを定着させる工夫がされていた。そのため、参加生徒はもちろんのこと、引率の先生方の評判がうなぎ登りで、体験学習の予約が年々増えていて対応しきれないくらいとの嬉しい悲鳴を聞いた。

また、管理棟の設置については、単に施設管理のためではなく、利用者が安心して活動できる環境整備のために必要だったとの説明があった。観光という視点については、高尾の森自然学校には全く無いが、地域資源を活かした観光と自然保全の両立を強く意識するべきという助言をいただいた。

(3) 環境教育について

国立青少年教育振興機構の調査について紹介があり、幼少期に自然体験をした子どもは、

- ・学習意欲が高い
- ・困難時に前向きになれる
- ・分からないことを自ら調べる

などの傾向があるとのデータであり、「森の幼稚園」など自然体験活動の重要性について説明があった。また、単なるレクリエーションではなく、人格形成や主体性形成に自然体験が大きく関わるという点は、秋田市の教育政策においても大変示唆に富む内容であった。

(4) 所感

高尾の森自然学校は、単なる自然体験施設ではなく、「人と自然の関係性を再構築する教育拠点」として機能していると感じた。特に、自然保全を「コスト」ではなく、教育・観光・地域価値向上へとつなげている点が印象的であった。

秋田市は豊かな自然を有しているが、それを体系的な環境教育や地域価値向上へ十分に活かしているとは言い難い。また、里山管理についても、従来型の「地域住民頼み」だけでは限界が来ている。その中で、企業・財団・市民・行政が連携しながら、自然保全を地域政策として位置づける高尾の取り組みは、今後の秋田市において大変参考になると感じた。

2. 千葉市「きぼ一る」について【5月28日（木）9:00～11:00】

(1) 概要

「きぼ一る」は、千葉市の中心市街地に整備された複合施設であり、子ども交流館、子育て支援館、子ども科学館の3つの施設などが集約されている。子ども・若者支援、居場所づくり、学習支援、科学教育、子育て支援など、多面的な機能を持つ施設である。

(2) 子ども交流館について

施設内には、23 席の学習スペース、多目的スペース、ダンス利用可能エリア、話し合い可能スペースなどが整備されており、子ども・若者が自由に過ごせる環境づくりが行われていた。また、こどものまち CBT というプログラムが千葉市では行われており、その会場として使われているとのこと。子ども参画の考え方もふんだんに取り入れられていた。

※こどものまち CBT は、開催前の企画段階から、こどもが主体的に関与し、こどもたちだけで市役所をはじめ、お店や会社などを運営する「ごっこ遊び」の集合体として“まち”を運営するプログラムです。参加するこどもたちは、“まち”のお店や会社で働き、対価として”まち”の中だけで通用するお金”カフェ”を使った買い物や CBT 市長選挙などの疑似社会体験をする中で、協働作業や協議による課題解決を通して、社会へ参加することを学びます。

最近の中高生の利用形態は、学習が多いということで、学習できる環境の充実を図っていた。行政との連携を重視し、「子どもが中心」という考え方が徹底されていたのが印象的だった。

(3) 子育て支援館（子ども広場）について

子育て支援館（子ども広場）は、ビルの 1 フロア全部を使っており、非常に広い空間を持つことが特徴。年間利用者は約 6 万人。千葉市全体では、6 区 20 施設の子ども関連施設が展開されており、地域ごとの子育て支援体制が整備されていた。一方で、利用人数にはばらつきもあり、日平均約 200 人程度との説明があった。広い施設であることのメリット・デメリットについても説明があり、運営面では利用状況の平準化などが課題とのことであった。施設のエレベーターが、子ども交流館（3～5 階）と子育て支援館（6 階）が同じ専用エレベーター（3～6 階にしか停まらない）であり、未就学児～高校生までの子どもが利用できるスペースとして集約・独立しているのがとても利用しやすいと感じた。

(4) 子ども科学館について

子ども科学館は、同じ「きぼーる」という施設内に存在するが、子ども交流館や子育て支援館とは別のエレベーターを使って 7 階に移動する必要がある、独立している。一般的な科学館だが、プラネタリウムがあり、秋田市のアルヴェの自然科学学習館と秋田県児童会館を併せたような規模感であった。説明するスタッフやボランティアが常駐しており、親子でも個人でも利用しやすいと感じた。

(4) 所感

「きぼーる」は、単なる子ども施設ではなく、子ども・若者・保護者が安心して過ごせる「都市型の居場所」として機能していると感じた。特に印象的だったのは、勉強、ダンス、会話、交流など、子どもの多様な過ごし方を否定せず受け止める空間設計である。また、子ども施策を「支援」だけでなく、「参画」や「居場所づくり」として捉えている点も特徴的であった。秋田市においても、少子化や不登校、孤立、若者流出などが課題となる中、子ども・若者が自由に過ごし、多世代と関わる居場所づくりは今後重要になると感じた。さらに、子育て支援、科学教育、交流機能を一体的に整備することで、単独施設では生まれにくい相乗効果が生まれている点も参考になった。